

低学年児童期の学習

～保護者のみなさまへ～



第1回

学力形成で最も大切な時期って！？



弊社の低学年部門には、昨年までオリジナル講座の「ジュニアスクール」と、外部より導入した「玉井式国語的算数教室」の二つがありましたが、2025年から中学受験部門の下部組織である「ジュニアスクール」のみとなりました。地方都市で低学年児童対象の講座を複数維持するのは運営的に負担が大きく、十分な教育サービスを提供するのが難しくなったためです。このような経緯もあり、本コーナーも玉井式の講座内容に言及した記述が多数ある昨年度の掲載分を一旦取り下げ、書き改めることにいたしました。ご理解のほど、よろしくお願い申し上げます。

さて、再出発したコラムの第1回目は、「**学力形成で最も大切な時期はいつごろか**」ということを表題に掲げてみました。みなさんはどう思われますか？ 実のところ、このような問いかけをするのは本来意味のないことです。学力形成において大切な時期などないからです。人間は、子どもであれ大人であれ、常に今を大切に、新たな知見を得るために最善の努力をすべきなのは言うまでもありません。では、なぜこの問いかけを表題に掲げたのでしょうか。それは、何をやるにつけても高いレベルに到達するには、スタートから一定期間によい流れを築く必要があるからで、保護者の方々にそのことを意識していただくためです。「**何事も初めが肝心**」と言われるますが、それは偽りのない真実だと思います。



ご存知のように、子どもが正式に系統立てた学習を開始するのは**小学校入学**からです。そこからおよそ2～3年で**読み書きの初歩、数の取り扱いの初期段階**を通過しますが、この過程で学んだ事柄は先々の学習の発展の土台となるもので、**全ての学習活動の基礎**となります。この初期段階で学んだことが不確かなまま上の学年に進級すると例外なく壁に突き当たってしまいます。ちょっと例を挙げてみましょう。以下は、ある教育学者の著書にあった話で、ご自身の娘さんが算数学習で大変苦労された件（くだり）について書かれていました。



長女が小学校5年生のときでした。ある日、算数の宿題をしているのを横でみていてあまりにわからないので、試しに小数の計算をいくつかやらせてみたのです。ところが、小数点の打ちかえができない、割る数がたてられない、といった具合で、これがまったくできないのです。(中略)

小数の割り算ができないというのは、計算での全般的理解の不足を象徴しています。というのは、小数の割り算のなかに小学校でならう計算操作のほぼ全体がくみこまれているからです。このつまずきをとりもどすのに長女は大へん苦労しました。3, 4年生の教科書のおさらいからはじめて、基本的な事項をもういちど理解しなおし、練習します。つらい毎日が続きました。(※両親とも働いておられたため、おばあさんがつききりでサポートされたそうです) ほぼ1年これが続いて、ようやく人並みに算数の学力がとり戻せたのは6年生も終わりになったころでした。



この学者は東京大学のご出身で、有名な国公立大学の教授を務めた人です。そのような優秀な親の子どもでも、**初歩の学習段階でつまずくと取り返すのに大変な苦労を強いられることになる**のです。この学者の娘さんは、大学を出て社会人になってからもそのときの苦労を思い出し、家族との会話の際にしばしば話題にしていたそうです。



つぎに、**言葉の獲得が読みの理解に大きな影響を及ぼす**ことの事例をご紹介します。ずいぶん前のことですが、ある作家が息子さんの中学受験を思い立ち、受験のサポートをした経験について書かれた本を見つけ、おもしろそうなので読んでみたのですが、小学校低学年のお子さんをおもちの保護者の参考になりそうなエピソードがありました。以下はその一部分を抜粋したものです。

私が「塾長」として次男の家庭教師を始めてから、こんな問題にぶつかったことがあった。「果物店のAさんは、1個40円でリンゴを仕入れました。大きさがふぞろいだったので、大、中、小の3種類に分け、大は80円、中は60円、小は45円で売りましたが、25個はくさっていたので、処分しました。売れたリンゴの個数は、大は全体の60%、中は30%、小は、大と中をとった残りの80%より8個少なかったそうです。Aさんの利益は何円だったでしょうか。

これは大して難しい問題ではないのだが、わが息子は「処分」という言葉につまずいてしまった。「処分」というのが「タダで捨ててしまう」ことだと言うことが理解できず、そのため、問題全体の意味がわからなかったのだ。

この息子さんは、国語のテストでも同様の理由で躓いたそうです。低学年の頃のことですが、「はやぶさは、するどいはやつめで、えものをとらえます」という文章の一部分をもとに、「はやぶさは、何を使ってえものをとらえますか、二つあげなさい」という問題が出されました。息子さんは、二つ用意された解答欄の一つ目に「早つめ」と書き、もう一つは空欄にしてしまったそうです。「はやつめ」を一つの言葉と思い込み、もう一つがどうしてもわからなかったのです。以来、その作家の家では「はやつめ」が流行語になり、息子さんは「はやつめ少年」と呼ばれたとか。息子さんの乏しい語彙への対策に相当努力されたという話が、ユーモアを交えて紹介されていました。



小学校入学をきっかけにして、子どもたちは**リテラシー社会**の一員になります。それからの2~3年間は、身体的には大きな変化はないものの、学習活動の成果として内面において著しい進歩を遂げていきます。この段階で要求される学習の取り組みは難しいものではありませんが、疎かにすると学力形成の流れについて行けなくなります。次回からは、そのことを具体的に取り上げてお伝えし、どんな点に留意すべきかを共に考えてまいろうと思います。